

平安期丹後の須恵器生産と系譜

—名地谷遺跡出土遺物の再検討から—

(公財)兵庫県まちづくり技術センター 稲本悠一

1. はじめに

平安期の須恵器生産は、かつて須恵器生産史上の衰退期と評されたように、西日本の多くの地域において、生産地数が大幅に減少する傾向にある。丹後国(以下、「丹後」)もこの例に漏れず、奈良時代までの窯跡は複数確認されているが、平安期の事例は極めて少ない。資料の少なさもあって、丹後国の須恵器生産に関する研究は多くはないのが現状である。しかしながら、平安期丹後の須恵器生産は、当地において系譜を追うことができず、先行研究に指摘されるように他地域からの影響を受けて成立したとみられ、当該期の須恵器生産の展開を考える上で重要な資料である。

上述した資料の重要性を踏まえ、筆者は名地谷遺跡(図1、京都府京丹後市峰山町)の出土遺物を再検討した。本論は、再検討で得られた知見を報告し、平安期丹後の須恵器生産の様相とその系譜を再考するものである。

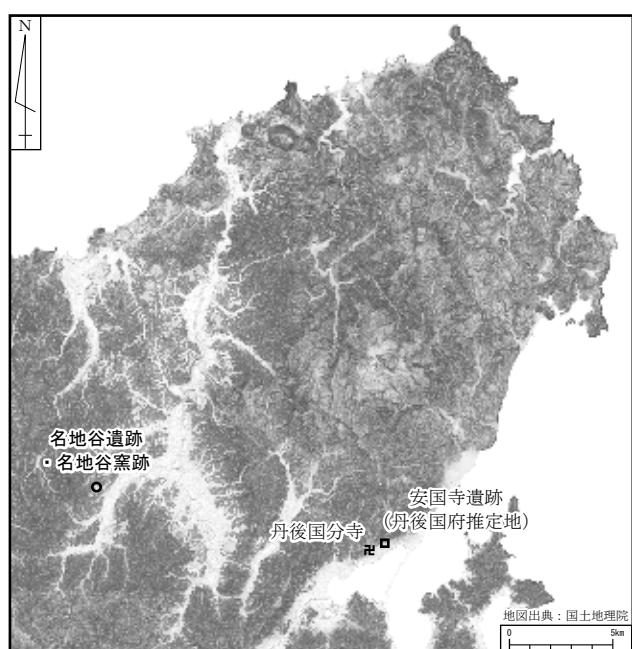


図1 平安期丹後の須恵器生産遺跡と周辺

2. 先行研究と本論の視点

(1)研究史

丹後の須恵器生産について、体系的な検討が進められたのは1970年代以降である。杉原和雄氏の研究がその嚆矢といえるが、当時は平安期の資料が少なく、9世紀代までの流れが示された(杉原1974)。その後、杉原氏や山田邦和氏が京都府下の窯跡についてまとめ(杉原1981・山田1983)、奈良時代の窯跡の発掘調査事例も増加したものの(森・斎藤1991)、平安期の須恵器生産に関する研究は低調であった。

一方、平安期丹後の消費地遺跡では、底部に回転糸切り痕を残す須恵器の出土が知られていた。ただし、その検討は低調で、当地域の平安期土器研究において重視されたのは、良好な資料に恵まれた黒色土器であった。そして、当地域の黒色土器の成立を語る際、器形や成形技法の類似性(回転糸切り痕を残した円盤高台(平高台)である点やロクロ成形である点)から、須恵器との関連を論じる動きが展開した。一連の研究動向については、岸岡貴英氏の論考(岸岡2001a)に詳しいが、以下、改めて確認しておく。

さて、早い段階の研究として、高橋美久二氏の業績が挙げられる。高橋氏は平安期丹後の土器編年を検討し、「1類黒色土器(筆者註：土師器の胎土で、体部中段に稜をもち、口縁端部で外反するもので、底部は削り出しによってしっかりした高い台をつくるが、底面は糸切りのままにしておくもの)は明らかに須恵器のロクロ成形法をとりいれた土師器から成立した」とした(高橋1976:5頁)。その後、丹後の黒色土器を体系的に検討した竹原一彦氏は、最も古い第一段階の年代を10世紀末から11世紀前半とし、丹後の須恵器工人が土師器生産を開始し、その後、篠窯跡群(以下、「篠窯」)などから緑釉陶器生産技術を取り入れながら黒色土器生産を開始したとした(竹原1987)。当時は、平安期の須恵器生産の様相が不明瞭であったため、土器生産の実態がみえない空白期に土師器生産を想定することで、須恵器工人が生産品目や製作技術を変えながら、黒色土器生産に至つ

たという見方を提示したのだろう。一方、西日本を対象に、広域的な視点で中世土器椀を論じた森隆氏は、丹後の黒色土器について、「播磨型須恵器椀」に類似する平高台椀が主流と評価した(森1992)。また、中島陽太郎氏は、宮津市成相寺旧境内出土の土器から、土師器の器形が須恵器椀の模倣とみられること、黒色土器に兵庫丹波や播磨地方からの影響を示唆し(中島1992)、百瀬正恒氏は当地域の土器様相を概説する中で、10世紀の須恵器生産は不明としながらも「10世紀後半から11世紀の回転台成形の黒色土器・土師器は、播磨の各地に展開する須恵器窯と同一器形・手法で同じ文化圏である」とした(百瀬1995:106頁)。

1990年代後半には、平安中期の須恵器生産遺跡である名地谷窯跡(細川1998)と名地谷遺跡(岸岡1999)の報告が相次いで発表され、当該期須恵器研究の基盤が整備された。岸岡氏はこれらの成果を中心に体系的な研究を進め、両生産地の年代を詳細に検討した上で、椀の製作技法に播磨地域の影響がみられること、鉢の形態に篠窯の影響がみられることなどを指摘した(岸岡2001a・b)。また、同時期には、松尾史子氏も、回転台土師器の検討を中心に平安期丹後の土器の変遷を示した(松尾2000・2001)。その後、片山博道氏は、平高台椀の検討から平安期西日本における須恵器生産の技術導入関係を導いており、その中で丹後名地谷周辺の須恵器生産が丹波国篠窯の系譜を引くことを示した(片山2009b)。

(2)名地谷遺跡と周辺の窯跡に関する先行研究

次に本論で再検討する名地谷遺跡と周辺に位置する名地谷窯跡の内容について、既往の研究(岸岡2001a・b)を参考に詳しくみておく¹。両遺跡は京都府京丹後市峰山町に位置する(図1)。当地は古代の丹後国丹波郡にあたり、平安時代中期成立の『倭名類聚抄』にみえる新治郷あるいは丹波郷と推定される(池邊1970、石川1987)。

名地谷窯跡 名地谷窯跡は播磨の須恵器生産遺跡(札馬窯)との比較から、10世紀前半の年代と推測された。発掘調査では、地上式窯が検出されており、遺物は椀(図2-1~4)と鉢(図2-5)が出土した。提示された遺物が少なく、全体像は不明

だが、同時期の他の須恵器生産遺跡の状況に鑑みれば、上述の内容は生産された器種のごく一部と推測される。注目されるのは、底部回転糸切りが多数を占める椀の中に、少数ながら、底部ヘラ切りの椀がみられる点である(図2)。

名地谷遺跡 名地谷窯跡との様相差、他地域との比較から、10世紀中頃~後半の年代と推測された。発掘調査(第2次調査)では、窯体の焚口と前庭部、灰原が検出され、遺物は椀(図2-6・7)、皿(図2-8・9)、鉢(図2-11・12)、長頸壺(図2-13・14)、甕、土師器の椀と甕、黒色土器椀(図2-15)が出土した。これらのうち、鉢については、名地谷窯跡のものと合わせて、「篠窯跡群の鉢の製作技法の影響をもっとも強く受けつつも、他の技法も取入れながら制作された」と評価された(岸岡2001b)。一方、名地谷窯跡の鉢とは口縁部形状に大きな差異がみられることから、「2~3の型式差を考える必要がある」とも指摘された(岸岡2001a:396頁)。

(3)課題と検討の視点

以上のように、平安期丹後の土器研究は、須恵器、黒色土器、土師器それぞれ、あるいは器質を横断しての検討が進められてきた。先行研究でおよそ共通する見解は以下の2点である。

①黒色土器は、須恵器あるいは回転台土師器の製作技術、系譜を引く土器であること。

②平安中期の丹後の須恵器生産は他地域からの技術的な影響を受けていること。

①については、本論では議論しないが、須恵器生産遺跡である名地谷遺跡において、丹後で最古相の黒色土器が出土している点は重要である。そして、黒色土器が須恵器あるいは回転台土師器の強い影響を受けて成立したものと想定するならば、当該地域の須恵器生産の様相と、②のような視点に基づく系譜の検討は重要であろう。

次章では、上述の視点のもと、資料を実見しながら、既往の論考では提示されていなかった資料を示す。そして、新資料と既往の調査成果を総合的に踏まえた上で、丹後の須恵器生産の系譜について検討していく。

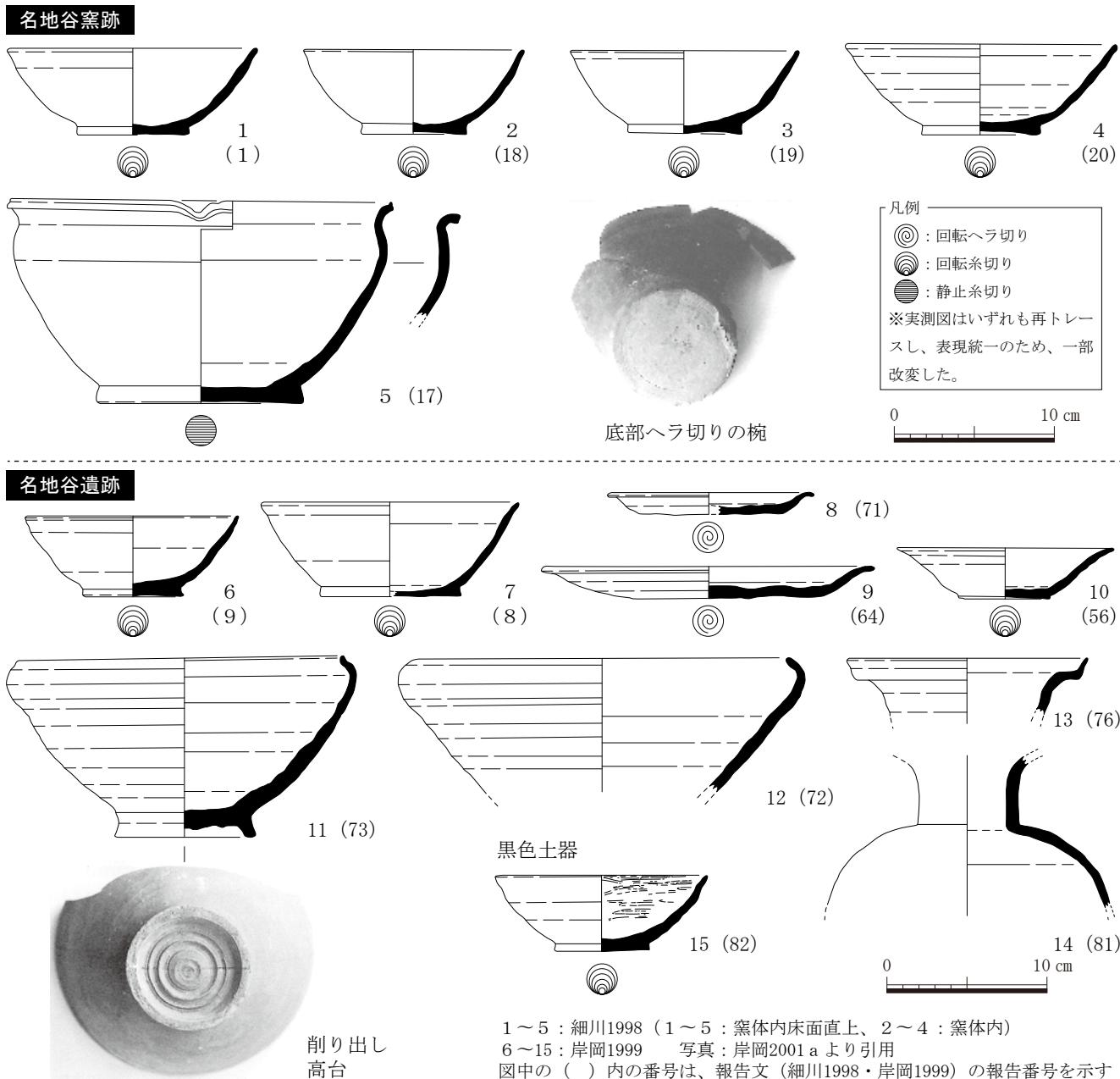


図2 主な出土遺物

3. 名地谷遺跡の再検討

(1)新資料の提示

本章では、名地谷遺跡第2次調査で灰原から出土した資料の再検討を通じ、得られた知見を提示する。今回は、従来の報告(岸岡1999)において未提示であったが、当遺跡の須恵器生産を考える上で重要と判断した遺物を中心に資料化した(図3・4、写真1~6)。

16は椀の破片である。外面口縁部付近に幅1.0~1.5mmの沈線が施される。

17は片口鉢の口縁部の破片である。名地谷窯跡では片口鉢(図2-5)の存在が知られていたが、

名地谷遺跡では未確認であった。

18は双耳壺の肩部から頸部にかけての破片である。残存状況が悪いため、詳細は判断し得ないが、耳の製作技法が特徴的で、3つの粘土を接合して1つの耳に整形したとみられる。これについては、中央部の粘土紐の両側に粘土塊を接合してナデつけた可能性、3本の粘土紐を接合して貼り付けた可能性の2つを提示しておく。なお、既に報告されている壺口縁部片(図2-13)は、大きさからして18のような双耳壺の口縁部であった可能性がある。

19はいわゆる突帯双耳壺の肩部の破片である。突帯は幅約1.0cm、断面形がおよそ台形を呈する。

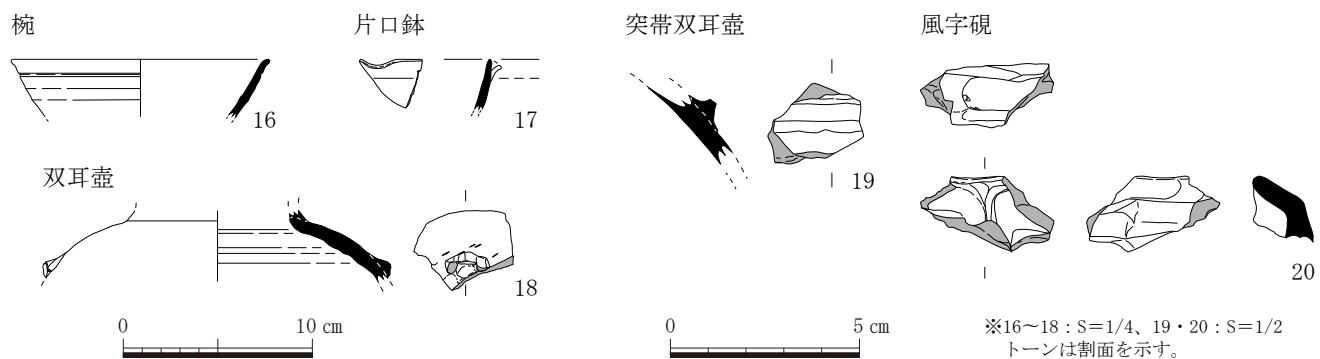


図3 新たに確認した遺物



写真1 梗 (16)

写真2 片口鉢 (17)

写真3 双耳壺 (18)



写真4 突帶双耳壺 (19)

写真5 風字硯 (20, 上から)

写真6 風字硯 (20, 後背から)

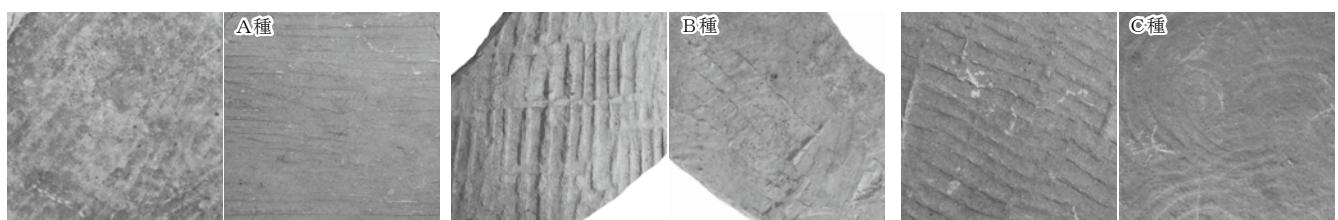


図4 須恵器壺の内外面調整のパターン

突帶を有する壺は、通常肩部に一対の耳を有するが、当破片は残存状況が悪く、全形は不明である。

20は風字硯の破片である。硯頭に近い部分の破片であり、硯面の中央部に縦方向の区画を付した、いわゆる二面硯である。外面には、ほぼ全面に手持ちヘラケズリの痕跡が確認できる。

図4は甕の破片の写真である。外面の調整は全て平行タタキだが、内面の調整には3つのパターン(以下、「A～C種」と呼称)がみられた。概略は以下の通りである。

A種→内面：同心円当て具上にハケ目

B種→内面：同心円当て具上に平行タタキ

C種→内面：同心円当て具

いずれも全形を判断しえない破片であり、詳細な検討はしえない。ただし、A・B種とした事例は、管見の限り、同時期の他の須恵器生産遺跡において類例を見出せない。今後も、注視する必要があるが、類例がなければ、名地谷遺跡産須恵器甕と判断するメルクマールとなる可能性がある。

(2)小結

以上、本章では少ないながらも、名地谷遺跡の灰原資料を再検討し、新たな資料を提示した。次

章では、これら新資料も含め、丹後の須恵器生産の系譜を再検討する。

4. 平安期丹後の須恵器生産とその系譜

平安中期の丹後の須恵器生産について、名地谷窯跡が最も古く、その後、名地谷遺跡へと変遷することが明らかになって20年以上が経過した。現在でも、付近において、名地谷窯跡の直前段階の須恵器生産遺跡は確認されておらず、当該地域における継続的な生産を想定することは難しい。したがって、名地谷窯跡の須恵器生産は、他地域からの系譜の中で捉えるのが妥当である。

他地域に系譜を求める場合、他の須恵器生産地から当地へと生産技術がどのようにもたらされたのか、すなわち工人移動の様相については、さまざまなパターンが想定される。この点を検討した菱田哲郎氏の研究では、「巡回型」、「指導型」、「帰郷型」、「帰郷指導型」といったモデルが提示されており(菱田1992)、平安期須恵器生産の展開を検討する上でも重要な視点となろう。ただし、本論は新資料の提示と系譜の検討に重きを置くため、工人移動の実態については、周辺の様相も含めた別稿を用意することにしたい。

さて、系譜のみに限れば、多くの先行研究において、上述の「他の須恵器生産地」に丹波国(篠窯)が想定されてきたことは先にも述べた。しかしながら、このような想定について、近年の研究や本論の再検討から、筆者は見直しが必要と考える。

以下では、先行研究でも注目された丹波篠窯や播磨の諸窯を主な比較対象とし、遺物と窯体構造に注目しながら系譜関係をみていこう。

なお、北近畿(但馬・丹波)においては、同時期の窯が散発的に確認できるが、これらは操業期間も短く、小規模な窯跡群であり、現状系譜元となる可能性は低いと考えているため、本論の検討対象としていない。

(1) 遺物からみた系譜

器種構成 まず、大まかな器種構成に焦点を当てると、名地谷周辺の須恵器生産は、円盤高台を有する椀が圧倒的多数を占め、その他の器種は少数

である。近年の報告(東2024)により、名地谷窯跡に先行する窯跡に若干ながら輪高台椀が存在することが明らかになるなど、器種構成に関する新知見が提示されたが、いずれにせよ供膳具主体の生産であったことは明らかである。

そこで、同時期の他地域の事例を見渡すと、丹波篠窯では椀を主体としながら、杯Aや輪高台を有する杯Bが生産されている(大阪大学考古学研究室篠窯調査団2012)。また、東播磨(現神戸市西区)の神出窯跡群(兵庫県教育委員会2011)や北摂津(現三田市)の相野窯跡群(兵庫県教育委員会1992、以下、「相野窯」)でも、円盤高台を有する椀に加え、輪高台椀が一定数確認できる。これらに対し、兵庫県加東市から西脇市にかけて広がる東播北部窯跡群(大谷女子大学資料館1990・西脇市郷土資料館2005)や西播磨(現相生市・たつの市)の相生・龍野窯跡群(兵庫県教育委員会2003ほか)では、10世紀代に輪高台椀は生産されない(稻本2023)。以上の様相差はあるものの、近年の報告(東2024)も踏まえると、主要な供膳具の器種構成や様相は、当該期の諸窯におおよそ類似すると捉えられる。

次に個別器種の器形や製作技法に目を向けよう。なお、特に断らない限り、以下の内容は上掲の各書に拠る。

名地谷窯跡 当遺跡の資料については、椀と鉢が注目される。第一に、椀の底部の切り離し技法にヘラ切りと回転糸切り双方が確認された点は重要である(図2)。篠窯では、椀の切り離しに回転糸切りを採用し、ヘラ切りを用いた事例は確認できない。他方、播磨の諸窯や相野窯では、双方が確認できる。ただし、播磨諸窯においても、内面見込みに段を有する椀が主体を占める東播磨、有さないものののみの西播磨、双方が併存する東播北部といった地域差がみられる点には注意を要する。第二に、名地谷窯跡と名地谷遺跡で確認された片口を有する鉢(図2-5・図3-17)は、篠窯ではほとんどみられないが、播磨諸窯では一般的な器形である。なお、相野窯の鉢は、器形的には似るが、底部ヘラ切りのため、技術的に異なる。

名地谷遺跡 当遺跡第2次調査の資料では、今回

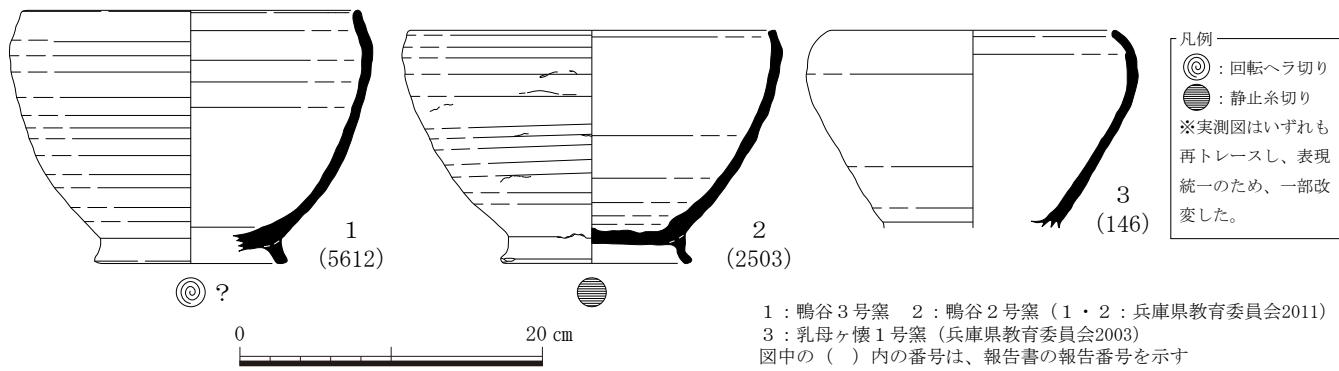


図5 播磨の鉢の諸例

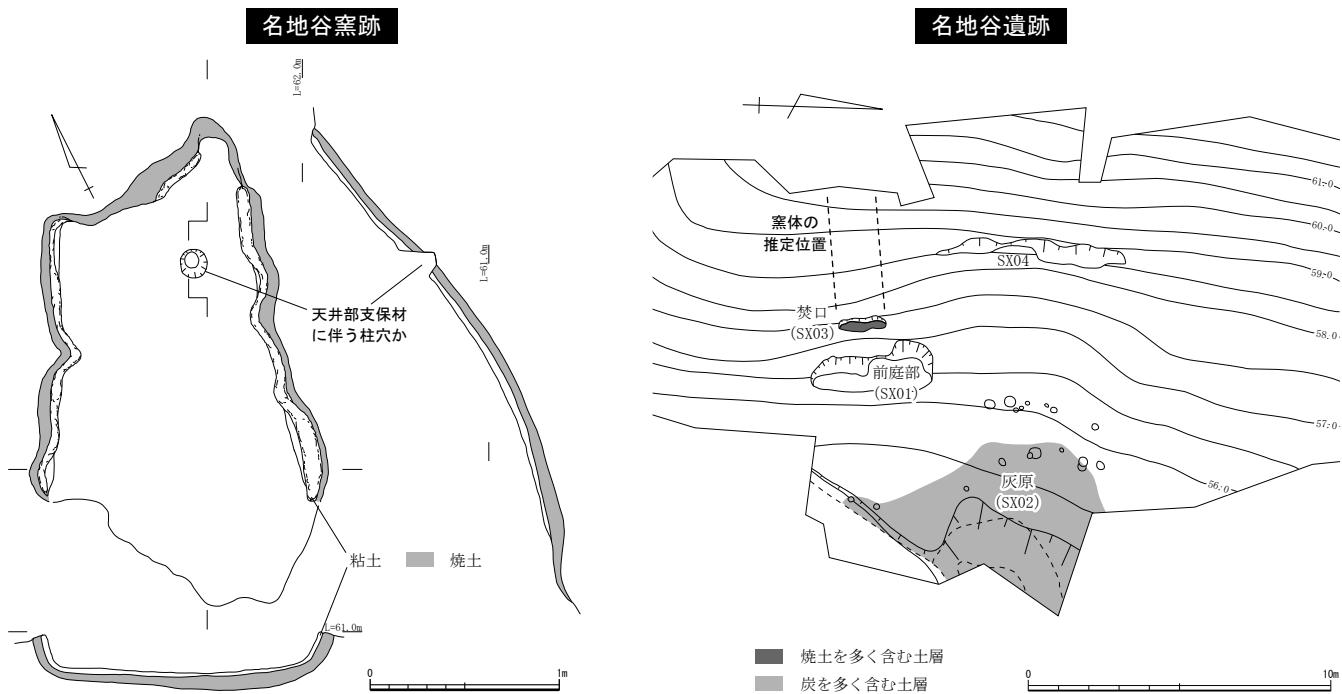


図6 遺構平面図（細川1998・岸岡1999を再トレース・加筆し作成）

の再検討で明らかになった突帶双耳壺（図3-19）の存在が注目される。突帶双耳壺は篠窯では生産されず、播磨諸窯や北摂津などに特徴的な器種である。ただし、それらの系譜を引くとみられる但馬や丹波などの生産地でも確認できるため、突帶双耳壺のみで系譜を限定することは厳しい。

加えて、これまで篠鉢の影響を受けたとされてきた鉢（図2-11・12）についても、再考の余地があると考える。確かに、名地谷遺跡の鉢は、大まかなプロポーションに注目すれば、篠鉢を模倣したものと捉えられなくもない。ただし、篠鉢は、意図的に口縁端部を屈曲させたり巻き込むことで独自の形状に整形しており、名地谷遺跡の鉢とは志向する形態そのものが異なる。そこで他地域の事例を参照すると、播磨諸窯の鉢が類例として挙

げられる。図5には、丹後の土器研究が大きく進んだ1990年代後半から2000年代初頭以降に公表された播磨の窯跡資料を示した。図5-1は東播磨の神出窯跡群鴨谷3号窯、図5-2は同窯跡群の鴨谷2号窯出土の鉢である。前者は10世紀中葉、後者は10世紀後葉から11世紀前後の年代が想定されており（森内2011）、想定される名地谷遺跡の年代観とも相違ない。なお、図5-3は西播磨の乳母ヶ懐1号窯の鉢で、11世紀前半頃のものとみられる（稻本2023）。名地谷遺跡の鉢と比べると、これらの鉢は、より底形が大きく、貼り付け高台であるなど差異もみられるが、いずれも体部から口縁部まで一連で成形する点が共通する。上述の3個体のうち東播磨の2個体は、仏具たる鉄鉢形（鉢A）の系譜に連なるものとして報告

されており、筆者も異論はなく、器形の類似に注目するならば、名地谷遺跡の鉢も仏具であった可能性を想定できる。これまで、名地谷窯跡と名地谷遺跡の鉢の形態が大きく異なることが指摘されてきたが(岸岡2001a)、両者の違いは調理具の片口鉢と仏具の鉢という、そもそもの用途と器種が異なっていたことに起因するのではないだろうか。

(2)窯体構造からみた系譜

次に、窯体構造についてみていく(図6)。まず、名地谷窯跡の窯体は部分的な残存であるが、地山の掘り込みが約20.0cmと極めて浅い。また、名地谷遺跡では、窯体は不明瞭ながら、窯体の焚口と前庭部が検出された。後者の残りの悪さが流出によることは間違いないが、前者の事例と合わせると、両遺跡の窯体構造はもともと遺構として認識しうる部分が少ない、すなわち掘り込みの浅い地上窯体構築式窯(以下、「地上式窯」)であったと考えれば理解しやすい。名地谷窯跡では、窯体側壁の支保材に伴うピットは確認されていないが、焼成部中央において直径15.0cm、深さ5.0~10.0cmのピットが検出されており、これは天井を架構するための支保材に伴うピットであった可能性が高い。

では、両窯に共通するとみられる地上式窯の系譜はどこに求められるだろうか。まず、丹波篠窯では、9世紀第4四半期とされる大谷3号窯を最後に、地上式窯は確認できず、10世紀以降は小型三角窯が採用される(稻本2021ほか)。他方、播磨諸窯、相野窯では、10世紀代には地上式の窯体が主流である(牛谷・浜中2010)。名地谷窯跡、名地谷遺跡ともに窯体の残存状況が悪いため、詳細な検討をしえないが、現状の資料からみると、播磨諸窯や北摂津が確度の高い候補として挙げられよう。

(3)小結

やや冗長になったが、以上を総合すれば、名地谷窯跡と名地谷遺跡の須恵器生産の系譜は、丹波篠窯よりは播磨の諸窯に求めるのが穩当であろう。したがって、かつて岸岡氏が指摘した内容(岸岡2001a・b)の一部を追認、補強した形となる。

なお、本論では、広く播磨の諸窯に系譜を想定したが、先にも述べたように各生産地には地域差が認められる。この点については、片山氏も「西播系・東播系・北播系」という地域性を示している(片山2009a:162頁)が、これ以上の検討には、播磨諸窯の精査が急務である。また、同時期には但馬や丹波にも、名地谷窯跡同様、播磨の系譜を引くと考えられる生産地が複数存在する。これらは畿内周縁部における土器の変化や生産地間交流を考える重要な資料であり、今後広い視野に基づく検討が求められる。

5. おわりに

以上、名地谷遺跡2次調査の再検討を含め、平安期丹後の須恵器生産とその系譜について言及した。再検討の結果、名地谷周辺の須恵器生産の系譜が、丹波篠窯ではなく、播磨国に求められる可能性を指摘した。ただし、肝心の各生産地の年代に関しては、従来の研究に依拠しているため課題が残る。筆者は現在、播磨をはじめとする周辺諸窯の再検討を進めているため、詳細な年代や系譜については、それらをまとめた後に再論することにしたい。

また、本論で指摘した課題以外に、A. 須恵器生産開始と他地域からの技術導入の背景、B. 須恵器工人のその後、も重要な問題である。特にAについては、岸岡氏も注目したように(岸岡2001a)、石川登志雄氏の研究(石川1987)に示唆に富む指摘が示されている。石川氏は、中世丹後国全体の荘園・公領の分布を示した『丹後国諸荘園郷保惣田数帳目録』の記載をもとに「荘園の成立が相対的に抑制的であった丹波郡は、与謝郡北半の国衙所在地とも隣接して在庁勢力の後衛的基盤をなし」(石川1987:496頁)、「丹後国田数帳にみられる郷の性格については、(中略)すべてが倭名抄郷名の「郷」であることから、本来古代律令制下の地方行政単位の郷の系譜をひくもので国衙に直結する公領であった」(同:497頁)とした。つまり、石川氏の研究に依れば、名地谷周辺の須恵器生産地は、新治郷か丹波郷いずれであろうと国衙に直結する公領内での生産活動ということにな

る。当地の須恵器生産体制を検討する上で重要であろう。また、Bについては、以後盛行する土師器や黒色土器とも関連する問題であり、当該期における窯業生産の変化を検討する上で重要であろう。

課題は山積しているが、本論が課題解決の一助となれば幸いである。

謝辞 ふるさとミュージアム丹後の岸岡貴英館長、松尾史子氏には、資料調査にご対応いただき、その成果を丹後郷土資料館調査だよりに執筆する機会を頂きました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

また、本稿脱稿後に東昭吾氏より、名地谷窯跡・名地谷遺跡を含む、付近の窯跡群(氏は二箇窯跡群と呼称)の分布調査で得られた窯跡採集遺物を多数実見させていただき、その成果をまとめた報告書(東昭吾2024)をご恵与いただいた。氏の研究成果を十分に反映できなかつたが、深く感謝いたします。

注

(1)両窯の資料のほか、付近の青谷窯跡採集遺物や元五箇小学校収蔵資料が同時期の窯跡資料として知られている。ただし、採集遺物が少なく、実態が不明瞭であり、実見もできなかつたため、以降の検討では扱わない。

(2)報告文(岸岡1999)では、蓋として報告された資料だが、その後の論考(岸岡2001a)において皿とされた。実物は実見しえなかつたが、平安京では当該期に須恵器の蓋がみられないこと、兵庫県の須恵器生産遺跡では同様の形態のものを皿と認定していることなどから、本論でも皿として扱う。

参考文献

- ・東昭吾2024『二箇窯跡群分布調査報告書Ⅰ』(北近畿における埋蔵文化財調査報告書 第3冊)
- ・池邊彌1970『和名類聚抄郷名考證(増訂版)』吉川弘文館

- ・石川登志雄1987「丹後国田数帳にみえる莊園公領について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 493-500頁
- ・稻本悠一2021「平安時代前期における須恵器生産の転換—丹波篠窯と畿内諸窯を中心に—」『古代文化』第72巻第4号 古代学協会 20-41頁
- ・稻本悠一2023「西播磨における須恵器生産の展開と変容—編年の再検討を中心に—」『須恵器生産の中世 変容と展開』(第41回 中世土器研究会資料集)日本中世土器研究会 17-30頁
- ・牛谷好伸・浜中有紀2010「第3部 各地域の窯の様相 第5章 関西」窯跡研究会編『古代窯業の基礎研究—須恵器窯の系譜と技術—』真陽社 317-337頁
- ・大阪大学考古学研究室篠窯調査団2012『篠窯跡群大谷3号窯の研究』(大阪大学文学研究科考古学研究報告第5冊)大阪大学大学院文学研究科考古学研究室
- ・片山博道2009a「平安時代における播磨の須恵器生産—播磨諸窯の総合的編年試案—」『花園大学考古学研究論叢Ⅱ』花園大学考古学研究室30周年記念論集刊行会 154-165頁
- ・片山博道2009b「平高台椀の基礎的研究—生産地の様相—」『考古学の視点 兵庫発信の考古学』間壁葭子喜寿記念論文集刊行会 101-110頁
- ・岸岡貴英1999「[1]名地谷遺跡第2次」『埋蔵文化財発掘調査概報(1999)』京都府教育委員会 38-47頁
- ・岸岡貴英2001a「京都府北部の平安時代の須恵器生産—峰山町名地谷窯跡・名地谷遺跡の検討より—」『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 387-398頁
- ・岸岡貴英2001b「名地谷窯跡と名地谷遺跡出土須恵器の再検討—平安時代の丹後国における須恵器生産と流通システムの解明に向けて—」『北近畿の考古学』両丹考古学研究会・但馬考古学研究会 131-146頁
- ・杉原和雄1974「新宮窯跡発掘調査概報」『埋蔵文化財発掘調査概報(1974)』京都府教育委員会
- ・杉原和雄1981「京都府北部の須恵器生産について」『丹後郷土資料館報』第2号 京都府立丹後郷土資

料館 27-38頁

- ・高橋美久二1976「丹後地方の平安時代土器」『京都考古』第25号 京都考古刊行会 1-6頁
- ・竹原一彦1987「丹後における黒色土器について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 381-393頁
- ・筒井崇史2001「丹後地域における奈良時代の須恵器について—窯跡出土資料からみた須恵器の変遷—」『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 311-320頁
- ・中井淳史・佐藤亜聖・新田和央2022「第1部 地域論 第7章 近畿」日本中世土器研究会編『新版概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 89-100頁
- ・中島陽太郎1992「成相寺旧境内地出土の土器」『中世土器の基礎研究Ⅷ 中世土器基本資料の再検討』日本中世土器研究会 203-210頁
- ・西脇市郷土資料館2005『西脇市窯跡調査集報』西脇市文化財調査報告書第15集 西脇市教育委員会
- ・菱田哲郎1992「須恵器生産の拡散と工人の動向」『考古学研究』第39巻第3号 考古学研究会 20-32頁
- ・兵庫県教育委員会1992『相野古窯跡群』兵庫県文化財調査報告書第115冊
- ・兵庫県教育委員会2003『緑ヶ丘窯址群Ⅲ』兵庫県文化財調査報告第253冊
- ・兵庫県教育委員会2011『神出窯跡群Ⅲ—神出鴨谷1号窯～3号窯・神出梶谷1号窯—』兵庫県文化財調査報告第407冊
- ・細川康晴1998「[5] 名地谷窯跡」『埋蔵文化財発掘調査概報(1998)』京都府教育委員会 80-83頁
- ・松尾史子2000「丹後地方の平安時代の土器—平安時代前期・中期の資料を中心として—」『中世土器の基礎研究XV 平安時代の土器・陶磁器研究』日本中世土器研究会 81-92頁
- ・松尾史子2001「丹後地方の回転台土師器—横枕遺跡出土遺物を中心に—」『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 409-418頁
- ・百瀬正恒1995「II 各地の土器様相 7. 近畿 (4) 丹波・丹後」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 100-107頁
- ・森内秀造2011「第6章 総括 第2節 出土遺物の

検討」兵庫県教育委員会『神出窯跡群Ⅲ—神出鴨谷1号窯～3号窯・神出梶谷1号窯—』兵庫県文化財調査報告第407冊 70-84頁

- ・森隆1992「中世土器の生産にみる地域型の提唱と工人集団の系譜について—西日本の土器窯生産を中心とした—」『中世土器の基礎研究Ⅷ 中世土器基本資料の再検討』日本中世土器研究会 3-54頁
- ・森正・斎藤優1991「(1)阿婆田窯跡群」『京都府遺跡調査概報』第44冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1-39頁
- ・山田邦和1983「京都府下の須恵器窯」『マムシ谷窯址発掘調査報告書』同志社大学校地学術調査委員会調査資料No.14 同志社大学校地学術調査委員会 95-126頁

図出典

- ・各図参照。なお、既報の遺物実測図については、再トレース時に表現統一のため、一部改変を加えた。